

# 発達障害者におけるテストアコモデーションに関する研究（1）

—自閉スペクトラム症者における時間延長効果—

○田中真理<sup>1</sup> 面高有作<sup>1</sup> 横田晋務<sup>1</sup> 鈴木大輔<sup>2</sup> 稲田尚子<sup>3</sup>

大野愛哉<sup>4,5</sup> 脇浜幸則<sup>4</sup> 立脇洋介<sup>1</sup>

1 九州大学 2 東北大学 3 帝京大学 4 九州大学大学院 5 日本学術振興会特別研究員

KEY WORDS: 発達障害 テストアコモデーション 時間延長

## 【問題と目的】

障害者差別解消法の施行（2016）により大学での障害学生への合理的配慮が義務化され、配慮内容の妥当性の判断が求められている（高橋;2015）。特に、可視化しにくい発達障害者への合理的配慮において公平性の担保に対する疑念が生じやすく（田中;2015）、配慮内容の必要性への無理解から発達障害当事者・周囲の学生・教職員・支援者相互の社会的合意形成が得にくい現状があり、意図的に偽りのパフォーマンスを示すことの症状妥当性検査の必要性（Harrison et al.;2007）も指摘されている。なかでも最も配慮内容の妥当性が問われる場面である大学入学試験での合理的配慮に関する検討は喫緊の課題である。

障害学生に対する試験の公平性に関して組織的研究（Willingham;1986）が行われてきており、時間延長・時間管理の補助・回答方式の変更調整・別室受験・指示内容の情報保障等の妥当性が検討されている（Lovett & Lewandowski,2015）。これらの配慮内容のうち試験時間延長については LD や ADHD が中心で（Brown et al.,2011,上野・立脇,2013）、本邦の発達障害学生のなかで最も多い自閉スペクトラム症者（ASD）を対象とした検討は、PC か紙かというテストの種類（Alt & Moreno, 2012）・別室受験（Lewis & Nolan,2013）・試験監督者の親和性の高さ（Szarko et al., 2013）に関する効果等に散見されるのみである。そこで本研究では、ASD 者における試験時間延長に関するテストアコモデーションの妥当性を下記の観点から検討することを目的とする（数字は連番発表の番号）。

・試験時間延長効果：ASD と定型発達の比較検討（2）

・試験における困り感と ASD 特性との関連（3）

## 【方法】

1. 対象者 定型発達（TD）群：高校2年生を対象とし、高校や新聞を通して募集を行い、191 名から応募があった。学力を考慮して対象者を選定し、最終的に 57 名から協力が得られた（平均年齢 16.2 歳）。ASD 群：大学入試の英語のテストに回答できることを考慮し、高校2年生から 20 歳の青年を募集し、13 名から協力が得られた（平均年齢 18.0 歳）。ASD 特性評価のため ADOS-2(Lord et al., 2012)を実施した（研究使用資格所持者と評定の一致を図り、一定水準を満たすテスターにより実施）。

2. 事前調査 ①独自に作成したテスト困り感アンケート 35 項目：

大学入試センター試験の受験経験のある ASD 者から、ASD 者が入学試験や高校や大学での定期試験場面で体験する困り感についての聴き取りを行った内容や先行研究を参考に項目を作成した。項目は、こだわり 5 項目、切り替え 8 項目、意図理解 3 項目、感覚過敏 4 項目、注意集中 5 項目、安心 3 項目、読解「一つ一つの平仮名はわかるが、ひとまとまりの単語の意味として理解するのが難しい」等 3 項目、視覚認知「問題文の行間が途中で変わると、非常に読みづらい」等 4 項目から構成されている。②ASD 困り感（高橋ら,2012）25 項目。対人的困り感「雑談などとりとめのない話をするのは苦手だ」「初対面のひととはどうやって話したらいいかわからない」「場違いなことをしてしまって困ることがある」等、自閉的困り感「突然予定が変更されると混乱してしまう」「行動が止まって固まってしまう、困ることがある」「とても嫌いな特定の音や匂いや肌ざわりなどがあって、困ることがある」等。

3. 学力テスト 大学の教室及び貸会議室で集合形式で実施された。テスト問題への回答ならびに別日に行われる認知機能検査へ参加した場合のみ、謝金を支払うことを説明した。学力テストは、休憩前後で、試験時間 80 分の通常条件と試験時間 105 分の延長条件を実施した。条件の順番は半数ずつランダムに割り当てた。テスト問題は、大学入試センター試験の英語問題（筆記）を使用した。出題内容および平均得点が近く、協力者の受験経験が少ないと考えられた平成 25・26 年度の試験を用い、25 年度を延長条件・26 年度を通常条件とした。各試験後に、事後アンケートを行い、①テスト結果の自信：「どれくらい自信がありますか」と尋ね、「全く自信がない」から「とても自信がある」の 5 段階で回答を求めた。②解答時間の適切性：「試験時間は十分でしたか」と尋ね、「全く足りなかった」から「大変余った」の 5 段階で回答を求めた。

## 【倫理的配慮】

所属機関の研究倫理委員会の承認、および対象者への研究参加への同意のうえ実施した。

本研究は科学研究費補助金の助成を受けた(JSPS KAKENHI Grant Number 18H01090)。

(TANAKA Mari, OMODAKA Yusaku, YOKOTA Susumu, SUZUKI Daisuke, INADA Naoko, OHNO Aikana, WAKIHAMA Yukinori, TATEWAKI Yosuke)